

詳細版

判断デザイン導入講習シリーズ

33.8万人のデータに基づく
組織で働く成人の研究と教育開発

組織行動科学[®]
Organizational-Andragogy[®]

ストック型産業に必要な判断処理能力を体系的に習得

1 | こんな状態はありませんか？

- 現場判断が熟練者に集中している
- 若手は判断できず、確認が増える
- 担当者によって対応品質が変わる

ストック型業務では対象ごとに条件が異なるため、前例では対処できない判断が日常的に発生します。

その結果、判断は熟練者に集中し、組織の対応能力＝事業成長は、「判断できる人の数」で止まる。

2 | この問題が起きやすい業務

- 建設施工・改修工事：建物ごとに条件が違う
- 設備点検・修繕対応：設備ごとに状態が違う
- 医療・介護対応：人ごとに状態が違う
- 技術設計・仕様判断：案件ごとに条件が違う
- BtoB営業・提案業務：顧客ごとに課題が違う
- 業務企画・運用設計：現場ごとに制約が違う
- 現場管理・責任者判断：状況ごとに優先が変わる

3 | なぜこの状態が起きるのか？

判断には、次の2種類あります。

- 知識で理解できる部分
- 経験によって習得される部分

しかし多くの企業では、

- どこが知識で理解できる部分なのか
 - どこが経験によって習得される部分なのか
- が整理されていません。

その結果、判断は熟練者の経験に依存する。

33.8万人・980社の分析が示す Organizational Andragogy[®]

経験を必要とする知識

参考：「経験を必要とする知識」を、なぜ組織は「学ばせよう」としてしまうのか？ | プレスリリース

[https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000165.000068315.html](https://prt看mes.jp/main/html/rd/p/000000165.000068315.html)

ストック型産業では、対象ごとに条件が異なり、対応のたびに前例では対処できない判断が発生する。判断が熟練者に集中すると、対応能力は「判断できる人の数」に制約されます。

本シリーズは、講義だけでは変わらない現場判断を、経験負荷とアンラーニング・リラーニングを通じて転換し、ストック型産業に必要な判断処理能力を段階的に理解・実装する体系講習です。

判断デザイン導入講習シリーズ | 構成一覧

段階・講習テーマ	主な内容
1回目：概念理解 ストック型産業に必要な判断デザイン	<ul style="list-style-type: none">・ストック型産業の構造特性・判断発生構造・判断処理能力の概念・判断構造設計の基本原則
2回目：学習転換 アンラーニング・リラーニングの進め方	<ul style="list-style-type: none">・既存判断様式の固定化構造・アンラーニングの原理・リラーニングの方法・質問→疑問→問い→判断の思考転換
3回目：実務実装 実務設計と経験負荷の運用	<ul style="list-style-type: none">・判断対象の整理・判断条件／手順設計・役割配置設計・経験負荷を伴う人材開発
4回目：組織展開 役割設計と判断運用の展開	<ul style="list-style-type: none">・判断構造の組織移転・判断運用設計・AI判断再現支援・判断処理能力の組織拡張

本シリーズで得られる成果

- ・ストック型産業の判断構造を理解できる
- ・前例依存型判断から脱却できる
- ・判断構造を実務に設計できる
- ・判断を組織で共有・運用できる

対象

- ストック型事業に関わる企業の
- ・判断業務を担う実務者/責任者
 - ・組織変革・人材開発担当
 - ・DX・業務設計担当

位置づけ

本シリーズは、判断構造設計に基づく人材開発プログラムです。研修・DX・コンサルでは扱われない「判断処理能力」という構造領域を対象とします。

メッセージ

ストック型産業では、対応能力の上限は“判断処理能力”で決まります。

判断構造設計に基づく人材開発により、**組織の判断処理能力を拡張**します。

判断デザインが適用される職種と判断場面

ストック型業務では、対象ごとに条件が異なるため、各職種において前例では対処できない判断が日常的に発生します。

本シリーズは、こうした実務判断を構造化し、再現可能な判断処理能力へ転換することを目的とします。

主な対象職種と判断場面

職種領域	主な判断対象	判断場面（例）
施工・工事	施工条件・工程	現場条件差による施工方法変更
保守・設備	劣化状態・対応方法	修繕可否・更新優先度判断
医療・ケア	個別状態・対応方針	利用者状態に応じた対応調整
設計・技術	条件適合・仕様	個別条件下での仕様確定
営業・提案	顧客条件・実行性	実行可能な提案構成判断
企画・運用	制約条件・運用設計	個別状況への運用適応
管理・責任者	優先度・配分	人員・対応順序判断

ストック型判断の特徴

これらの判断はすべて、

- 前例がそのまま適用できない
- 条件差が存在する
- 個別最適が必要

という特性を持ちます。

そのため判断は熟練者に集中しやすく、組織全体の対応能力は拡張されにくくなります。

本シリーズで扱う判断

本シリーズでは、実務判断を

- 判断対象
- 判断条件
- 判断手順
- 役割分担

として構造化し、**個人依存の判断を組織で再現可能な判断処理能力へ転換します。**

導入対象企業

以下の特性を持つストック型業務企業を対象とします。

対象業務特性

- スtock対象（既存設備・既存顧客・既存対象）を扱う業務比率が高い
- 対象ごとの条件差が大きい
- 前例適用が難しい

組織状態特性

- 熟練者への判断集中が発生している
- 判断が個人依存になっている
- 対応能力が人員数で制約されている
- 判断基準・手順が言語化されていない

該当例

- 建設改修・保守・設備・インフラ
- 医療・介護・教育
- 技術サービス・BtoB提案・運用設計業務

導入により得られる組織変化

本シリーズにより、判断は個人依存から構造化された組織能力へ転換します。

判断構造の変化

- 判断対象が明確化される
- 判断条件・基準が整理される
- 判断手順が構造化される
- 役割分担が定義される

組織能力の変化

- 熟練者依存の低減
- 判断の再現性向上
- 判断共有の促進
- 判断分散の実現

業務成果の変化

- 対応可能件数の拡張
- 判断品質の安定化
- 対応ばらつきの低減
- 組織全体の対応能力上限の拡張

講習シリーズの実施形態

本シリーズは、講義・演習・実務適用を組み合わせた体系講習です。

基本構成

- 全4回シリーズ
- 各回 半日研修 + 経験負荷（実務課題）
- 約2～4か月で実施

実施内容

- 判断構造講義
- 自社業務への適用演習
- 判断対象整理ワーク
- 判断条件・手順設計ワーク
- 役割配置設計ワーク

対象

- 実務責任者
- 判断業務担当者
- 業務設計／DX担当
- 人材開発担当

受講後に整備される判断構造

本シリーズ終了時、対象業務について以下の判断構造が整備されます。

判断対象

- 判断対象一覧
- 判断分類構造

判断条件

- 条件差整理表
- 判断基準定義

判断手順

- 判断フロー
- 分岐構造図

役割設計

- 判断役割配置
- 判断責任範囲

これにより、判断は個人依存から組織運用可能な構造へ転換します。

ストック型産業では、判断処理能力が産業拡張の上限を規定します

参考 | 判断デザインのアンラーニング・リラーニングの進め方

ストック型産業に必要な判断処理能力を、前例適用型の判断様式をアンラーニングし、構造化された判断対象・条件・手順をリラーニングすることで、段階的に理解・実装する。

項目	質問	疑問	問い	判断
目的	情報収集 (知識の差)	現実把握 (現実の差)	本質定義 (差の理由)	実行決定 (差を埋める)
対象	<ul style="list-style-type: none"> 前例 仕様 	<ul style="list-style-type: none"> 事実 条件差 	<ul style="list-style-type: none"> 原因 意味 	<ul style="list-style-type: none"> 方針 優先度
思考	検索・確認	観察・比較	理由・関係	意思・決定



質問は「知らないと気づいていることを確認」。疑問は「自分の前提と現実の差を見る」。問いは「なぜ差があるのかを考える」。判断は「差を埋めるためどうするか考え決める」。



33.8万人のデータに基づく
組織で働く成人の研究と教育開発

組織行動科学[®] Organizational-Andragogy[®]

reQuest

リクエスト株式会社（本社：東京都新宿区、代表取締役：甲畑智康）は、「より善くを目的に」を掲げ、980社・33.8万人の働く人達のデータに基づいた組織行動科学[®]を基盤に、7つの研究機関からなる企業です。

組織行動科学[®]は組織で働く私達の思考と行動が「なぜ起こり・なぜ続くのか」を事業環境と歴史・経験から解明し、より善く再現する手段です。

Behavioral Robotics[®] (HOBiROA[®]) 総研

OrgLogLab[®] (組織論理学[®] 研究センター)

smart creative management[®]総合研究所

XR HRD[®] (AIAndragogy[®]) 研究センター

ABA Operations Research[®]センター

人的資本開発プランニング[®]センター

公共行動研究室[®]

33.8万人の行動分析を踏まえた最新レポート

- 継続の心理的報酬が人材の質を分ける : <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000170.000068315.html>
- 越境学習を成果に変えるための実践 : <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000168.000068315.html>
- 人が変われなくなっている原因 : <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000159.000068315.html>
- 学べない大人が生まれる理由 : <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000162.000068315.html>
- 人事を事業成果に変換する : <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000155.000068315.html>
- 上位5%は背景から考える : <https://prtimes.jp/main/html/rd/p/000000150.000068315.html>

過去レポート : https://prtimes.jp/main/html/searchrlp/company_id/68315



Behavioral
Robotics[®]

1 | 対象＝ストック型産業の定義

ストック型産業は、既に存在する対象を扱い、対象ごとの個別性により条件が異なる。そのため、前例に頼れず、対応の度に判断が発生する産業です。例えば、

建設・住宅：リフォーム・リノベーション
 保守：設備・インフラの点検・修繕
 医療：患者ごとの診断・治療
 介護：利用者ごとのケア対応
 教育：学習者ごとの変容支援
 などが該当します。

2 | ストック市場の問題

ストック型産業では、対応のたびに前例では対処できない判断が発生します。

判断が熟練者に集中すると、判断件数が上限となり、対応能力は拡張できません。

対応能力の上限は、判断処理能力で決まります。

3 | 当社の解決原理

当社は、判断処理能力を設計・移転・拡張します。具体的には、

- ① 判断対象の整理
- ② 判断構造の設計
- ③ 判断手順の標準化
- ④ 役割分担の設計

により判断構造を外在化する。

これを基に適切な経験負荷を伴う実務設計による人材開発とAIによる判断再現支援を組み合わせ、ストックに必要な判断処理能力を組織に移転・拡張します。

その結果、対応能力の上限が拡張します。

4 | 独自性

通常支援：研修・意識改革・DX
 当社：判断構造そのものを設計
 対応能力の上限を規定する構造へ直接介入します。

研究基盤

- 33.8万人 - 980社 - 7研究領域

から人材と判断移転の構造を解明。

※ 構造補足

左記4項目は人材開発やAIに直接作用するものではなく、判断構造そのもの（外在化内容）です。

当社モデルは、以下の三層構造で成り立っています。

判断構造設計

↓

人材開発 + AI実装

↓

判断処理能力拡張

経験負荷を伴う人材開発とは、外在化した判断構造を実務で運用できるようにする訓練であり、特に既に経験を有する人材は従来の判断様式が固定化しているため、新たな判断を、現業の中では再現できません。

そのため当社の人材開発は、アンラーニング（既存判断の解除）とリラーニング（新判断の再構築）を伴います。

生成AIによる判断再現支援とは、外在化した判断構造をAIに実装することを指します。

したがって左記4項目は、人材開発とAIの共通基盤となります。

5 | プロダクトモデル

当社は、**ストック判断処理能力の設計・移転・拡張を段階的に提供**。

- ① **構造診断**： ストック判断構造の可視化・制約分析
- ② **判断工程設計**： 分岐構造・判断手順・役割配置の設計
- ③ **実装支援**： 現場導入・役割移行・経験負荷人材開発
- ④ **組織展開支援**： 組織内展開・AI判断再現実装
- ⑤ **産業展開**： 他部門・他領域・他産業への適用

プロダクトは、診断・設計・実装・展開の複合モデルで構成され、判断処理能力の拡張段階に応じてご提供します。

7 | 競合比較

観点	他社	当社
介入対象	人材能力・意識・ITツール	ストック判断構造
介入レイヤー	行動・教育・システム	判断処理能力
アプローチ	研修・DX・コンサル	判断対象・構造・手順・役割の設計
人材開発	研修・OJT	経験負荷：アンラーニング・リラーニング
AI活用	業務ツール化	判断再現実装
目的	能力向上・効率化	対応能力上限の拡張
効果の上限	個人能力・IT性能に依存	判断処理能力の拡張に比例
本質	人・ツールへの介入	構造そのものへの介入

6 | これまでの技術蓄積

- Phase1：住宅改修・建設領域でモデル確立
- Phase2：保守・インフラ・設備領域へ展開
- Phase3：医療・介護領域へ適用
- Phase4：公共・教育・社会システム領域
- 最終形：ストック型産業横断モデル

8 | メッセージ

ストック型産業では、**対応能力の上限は判断処理能力**で決まります。

当社は、**この未解決領域である“ストック判断処理能力”を研究・設計・移転・実装する**企業です。

9 | お問い合わせ

request@requestgroup.jp

私たちは、ストック領域の判断構造を設計する企業。

新築・新設・新人・新規ケアではなく、
修繕・改修・再学習・再ケアを要する
ストック型生活インフラの産業化を
判断構造設計により推進しています。

大人が安心して生きられる社会を目指し、
その安心を子供の安心へとつなぎます。

Societal Healthcare